

行動により責任の所在が不明確なために、自分でいじめを行っているという意識もなく、大問題になった時でも、自分が何をしているのかわからないような傾向にあります。

II. 中学生のいじめの特徴

いじめは、たかだか子どものイタズラやふざけにすぎないという見方が、いまだに根深く残っています。

こうした見方からすれば、いじめは子どもが成長し、分別がつくにつれておさまっていく現象であるかのように思えます。実際、ある調査によれば、中学生のいじめの経験率は、小学校に比べて少なくなっています。

しかし、決して中学校でいじめが鎮静化しているとは言えず、むしろ、中学生のいじめの形態上の特徴として現れています。

その一つは、中学生では、いじめられっ子が特定の子どもに固定化する傾向にあることです。中学校ではいじめられっ子の数は著しく減少し、また、いじめた子といじめられた子と同時に経験している子ども「被害・加害者」も減少しています。

一般に、いじめの段階や、いじめが遊びやふざけの中で行われている場合、「被害・加害者」の立場の入れ替わりが多くみられます。中学校で「被害・加害者」が減少しているのは、中学生のいじめが特定の子どもにしぼられ、典型的ないじめられっ子ターゲットとして固定化され、より発展した段階のいじめを多く含んでいることを語っています。

なお、いじめを周りで囁かしてておもしろがっている子ども(観衆)を加えると、中学生ではいじめ集団の規模は大きく膨れ上がり、集団いじめの様相を示してきます。

次に、子どものいじめに対する認知の仕方

の変化です。いじめはその動機を露骨に示した形より、むしろ遊びやふざけの形をとることが多くなります。小学生ではいじめとして認知されていた遊びも、中学生になると遊びやふざけとして捉える傾向にあり、この認知の変化は、小さないじめへの慣れであるとともに、規範や逸脱に対する見方や状況に応じて柔軟に対応する能力の発達にも起因します。

以上のように、中学生になると、特定の子どもがいじめが固定化し集中する傾向にあり、それが長期にわたることが多く、かつ集団いじめの形態をとる傾向が強くなります。

したがって、いじめ経験の減少は、主として加害・被害の立場の入れ替わりの減少や認知の変化によるものだが、いじめられた経験の減少はいじめの鎮静化を示すものではなく、むしろ陰湿化し、深刻な様相を呈している現れでもあります。

III. 心の居場所としての学級づくり

いじめに対して「おもしろがって見ている」「知らないふりをしている」という観衆や傍観者の立場の子どもも意外に多くいます。そこで、「いじめは絶対に許さない」といういじめに対しての徹底した否定意識や、「いじめはやめろ」といえる仲間意識を子どもに持たせるような学級づくりが、いじめを予防することに必要です。そのためには、

○子ども同士が、お互いに相手の立場や気持ちを考え、助け合い、支え合っていく人間関係を学級の中に育てる。

○学級集団の中で観察、傍観者の立場にいる多くの子どもの意識を変え、いじめたり、いじめられたりするとは、「どんな理由があるにせよ、絶対許さない」といった正義と勇気を尊び励ましていく。

○事例や作文、日記などをもとに、被害者の心の痛みや苦しみを理解させ、勇気を持って正しい行動や人を思いやる心を育てる指導を工夫する。

「いじめ」の心理臨床

教育学部
臨床・障害心理学講座

丸 藤太郎



○一人ひとりの子どもの個性が生かされるよう、子どもの主体的な参加方法を工夫し、協力して成し遂げる喜びを感得させる指導を工夫する。
(まつだ・まさふみ)

一. 「いじめっ子」のいじめ意識の希薄さ

「いじめ」についての調査報告、あるいは新聞やマスコミの報道などから注目されることの一つに、「いじめっ子」が自分のいじめが「どれほどひどく相手を傷つけていたか解らなかつた」とか、「面白かつたから」と答えるということが挙げられる。また、彼らは「反省してない」と非難されることも多い。

「いじめっ子」が、いじめた理由を尋ねられ、このように答えたり、反省してないように思われるのは、どのように理解されるのだろうか。心理臨床の経験から解することは、いじめっ子のこうした答えは、言い訳でも言い逃れでもないことである。

「面白かつたから」と言った子は、その時その場で、その子にできるだけの正直さと誠実さで答えたに違いない。

高い知的能力を持ち、優れた学業成績をあげているにもかかわらず、自分の言動が相手をどのような気持ちにさせるのか、自分の行為がどのような結果を生じさせるのかといっ

たことが、どうしても理解できない思春期の子どもたちのことが気になりだしたのは、二十年程前からであった。最初はひどく驚いてしまったが、このような子どもは今でも多くなってきた。いじめっ子が「面白かつたから」と答えるのには、このように相手の立場になって考えるという力が育っていないことを示しているように思われる。

「いじめ」では、しばしばいじめっ子は加害者、いじめられっ子は被害者として結論づけられてしまいがち。しかし、いじめっ子にそのような能力が育っていないとしたら、彼らには「いじめている」という意識が希薄なのであり、反省のしようがないことになる。こうした子どもたちに、相手の立場に立つて考えるということを真に体得させることは、心理臨床でも大変なエネルギーと時間が必要である。

二. 「いじめられっ子」の秘密主義

次に「いじめられっ子」では、彼らが教師や親へ援助を求めるよりも、むしろいじめられていることを秘密にしておこうとしたり、

時にはいじめっ子をかばったりすることが注目される。

いじめを教師や両親に「チクル」と、さらにいじめがエスカレートするのではないかといいることがある。いじめられていることを打ち明けられても、教師や親は、それでいじめがエスカレートすることは絶対ないと保証できない。できるとすれば、いじめられっ子をそのような状況から離すしかないだろう。

しかしそれでは、いじめられっ子にとつては、敗北を意味するかもしれないし、自尊心の低下、寂しさといったような複雑な気持ちを生じさせやすい。

教師や両親の援助を求めるといことはまた、「弱いこと」、「子どもであること」の証であるとも感じられるだろう。特に中学生や高校生ともなれば、「自立」とか「強い」ということは差し迫った課題となるからである。いじめられること自体、彼らにとつては「弱い」、「自分が駄目だから」として体験されがちであるので、成人へ援助を求めるといことにはより一層抵抗がある。

最後に、いじめられるという代価を支払ってでも、彼らも仲間集団に所属したいという強い欲求があることが挙げられる。ある意味では、いじめられても彼らは仲間意識があり、仲間が好きなのである。このことは、虐待を受ける子供が、親を告発せず、秘密にしておこうとすることと類似したところがあるだろう。

III. 「いじめ」の臨床心理学的援助

それでは、いじめについてどのような臨床心理学的援助ができるだろうか。いじめられっ子の援助として、三つのステップが考えられる。

第一のステップは、「いじめは、絶対に許されないことである」ということを徹底させることである。そのためには一時的に、いじめの状況から引き離すことも必要となるだろう。

第二のステップは、いじめられ体験から生じた不安、恐怖、身体的反応といったことを軽減するように援助することである。またいじめられっ子は、いじめを自分に原因があると信じていることがあり、この段階で自尊心を回復することが欠かせない。

第三のステップは、必要ならば友人関係を初めとして種々のソーシャル・スキルを身につけるように援助することである。

また、いじめられっ子だけでなく、いじめっ子への援助ということも忘れてはならない。いじめっ子が心理臨床家の所に相談にくるとは、あまりない。しかし、「いじめ」、「いじめられ」はコインの裏表であり、いじめられっ子がいじめっ子になることも希ではない。また、いじめっ子のいじめ意識の希薄さということからすれば、彼らにも援助が必要である。

最後に、われわれ自身が、自分に潜む「いじめ」をさらに深く自覚することである。というのは、子どもの種々の問題行動は、社会の歪みを鋭敏に映し出しているからである。いじめは、子どもから現代社会へ向けられた警告ではないだろうか。

プロフィール

(いちまる・とうたろう)

◇教育学部心理学科助教授

◇昭和十九年生まれ

◇専門は臨床心理学

◇趣味はジャズを聴くこと

イジメと学校

— 倫理学の視点から —

文学部倫理学教室

◆ 越智 貢

一. モラルの欠落?

ある新聞が、先日開かれたイジメに関するシンポジウム(「いじめを考える」七月二十日六日県民文化センター)の様子を大きく報じていた。その中で、パネリストの一人が次のように発言している。「今の子どもには優しさや思いやり、正義感、勇気が欠落している。だから、人間関係が希薄になり、他人とかわらぬ……」

優しさ、思いやり、正義感、勇気はモラルのアルファでありオメガだと言っている。そうしたモラルが、とりわけ「傍観者」に欠落しているからイジメが解消できない、そう彼は主張している。

私はこの主張には同意できない。彼が教育に無縁の人ではなく、現場の教育の責任者だったことを考えれば、なおさらだ。少しだけその理由に言及する。

(一) モラルは、ある時点で一気に身に備わるものではない。むしろ徐々に育まれ、熟成されていくものだ。子どものモラルがイジメを抑制できるほどに深化していかないとしても、それだけで欠落しているなどと言えない。モラルの「欠落」を「希薄化」と解すべきなら、それは子どもに先んじて、まず大人一般について言いうることだ。そうした現状を棚上げして、イジメの現

場に居合わせたという理由で一方的に子どもたちの希薄なモラルをとがめるのは、フェアな見方とは言いがたい。

(二) 仮に、子どもたちのモラルが欠落しているとしても、モラルが欠落しているから、人間関係が希薄になるわけではない。むしろ、モラルは人間関係の中で培われる。小学生や中学生にとつて、人間関係の中心は生徒どうしの関係や教師との関係にあるだろう。それらの関係の希薄化が、子どものモラルの熟成を妨げていると言っている。だが、その逆では決してない。

ここでなにより教師が考慮すべきことは、教師と子どもとの関係がモラルの育成を促すのに十全かどうか、という点である。子どものモラルの欠落を主張する前に、そうした反省こそ必要だろう。

(三) モラルはいつも個別的だ。かならず特定の状況下で発動する。たしかに、「傍観者」がイジメの問題をより困難なものにしていることは事実だろう。だが、だからといって、彼らにモラルの意識が欠落しているとは思われない。彼らにもモラルが発動する場面はいくつもある。親しい仲間がいる場所、あるいは家庭でのできごとの中で、あるいは街角で出会った人との間ですらも、とすれば、問題はむしろ、そうしたモラルが発動したい状況、すなわち学校そして学級のほうにあることにはならないか。